

日本語学会第 150 回大会発表要旨

The 150th Meeting of the Linguistic Society of Japan
Abstracts of Oral presentations and Poster presentations

期 日：2015 年 6 月 20 日（土）・21 日（日）

会 場：大東文化大学板橋キャンパス

〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1

Dates: June 20 (Sat) and 21 (Sun), 2015

Venue: Daito Bunka University, Itabashi Campus

1-9-1, Takashimadaira, Itabashi-ku, Tokyo, 175-8571, Japan

第 1 日（6 月 20 日）

13:00－18:00 口頭発表（1 号館，3 号館，中央棟）

第 2 日（6 月 21 日）

12:10－13:10 ポスター発表（3 号館 1 階 3-0106/7 教室）

Day1

13:00 - 18:00 Oral presentations (Bldg.1, Bldg.3 and Central Bldg.)

Day2

12:10 - 13:10 Poster presentations (Room 3-0106/7, The 1st floor of Bldg.3)

■口頭発表（6月20日（土） 13:00–18:00）

[A-1]

日・韓・中のヴォイス体系に関する一考察
—「働きかけの前景化・背景化」と「視点の固定化」の観点から—

全 相律

本研究は、日本語・韓国語・中国語という東アジアの3言語における代表的なヴォイス形式を、「働きかけの前景化・背景化」と「視点の固定化」という観点から考察したものである。その結果、日本語の「-(s)ase-」と「-(r)are-」のようなヴォイス形式に対しても、事態形成における「働きかけの前景化」は共通するものの、事態の関与者における「視点の固定化」のパターンが異なる文法形式であるという分析を提示することができ、韓国語や中国語のような同一形式で使役や受動の意味を両方表せる言語との接点を可視化することができる。その際、日本語の「てもらう」構文や上海語のヴォイス形式における意味・用法の違いなども視野に入れることで、それぞれの言語における様々な形式の関連性を立体的に捉えようとした。さらに、日本語を「視点重視言語」、韓国語と中国語を「働きかけ重視言語」と類型化し、それぞれの言語におけるパラメーターの階層の違いも指摘している。

[A-2]

アルタイ諸語、朝鮮語、日本語の従属節対格主語の機能について

山崎 雅人

トルコ語、モンゴル語と満洲語文語などのアルタイ諸語に加えて、朝鮮語と日本語も、従属節で対格名詞が意味上の主語となる構文を共有する。これらの言語は、対格主語が発話の主題となる機能は共通であるが、従属節述部の意味制限の程度によって段階的に関係づけられる。すなわち、アルタイ諸語<朝鮮語<日本語の順に、述部が対格主語の特徴を意味的に制限する度合いが厳格化すると考える。従属節述部が担う意味制限は、アルタイ諸語では特にないが、日本語は述部が話し手の主観的な評価や判定を下す[+stative]の意味素性を持つ名詞、形容（動）詞に限られ動詞(句)は容認可能性が低下する。また、朝鮮語は日本語ほど制限は厳しくないが、述部に動詞(句)を置く場合は、やはり主語の属性を述べる特定の情報に限られる点でアルタイ諸語とは性質を異にすると考える。

[A-3]

現代朝鮮語の ‘-lyeko (hata)’ に関する一考察
—日本語の「～ようと(する)」との相違を中心に—

平 香織

発表では、有情物主語の場合に意図や目的を、無情物主語の場合には今、まさに起ころうとする事態を表す朝鮮語の -lyeko (hata) を取り上げ、「～ようと(する)」との違いを考察する。意図・目的を表す際には -lyeko の形で文末に生起し得るため、森山(1990, 2000)による意志形「～よう」の観察を基に対照を試みた。その結果、-lyeko は独り言で使用できず、発話時点で既に行うことが決まっている意図を表す点で違いが見られた。無情物主語を取る -lyeko hata は状況別に分類した。「自然現象」の一部、「ある作用による状態変化」、「生理現象」には「～ようと(する)」が使用できない。後者二つについて朝鮮語では変化しつつある主語に視点を置いて表現するのに対し、日本語では観察者の立場から予測や予想を表す「～しそうだ」で表現する違いがあることを指摘した。また、自然現象の一部で使用できない理由についても論じる。

[A-4]

16世紀朝鮮語における形式名詞由来のモダリティ形式

小山内 優子

中期朝鮮語の形式名詞 to (こと) と kes (もの、こと) は、非現実連体形 -l が先行し、かつコピュラ -i- が後接した -l ti-, -l kesi- という形で当為のモダリティを表す。本発表の目的はこれら2つのモダリティ形式の違いを明らかにすることである。『翻訳小学』(1518年)および『小学諺解』(1588年)を主な調査資料として分析した結果、これらの形式には「否定」の観点から次の2つの相違点があることが明らかになった。第一に、連体形用言がどのような否定形式をとるかという点で顕著な違いがある。-l ti- は連体形用言の否定に aniho- (意志の否定), mal- (否定動詞) を用いるのが普通で、mwotho- (能力の否定) が現れることは稀である。一方、-l kesi- の連体形用言の否定は mwotho- が優勢である。第二に、それぞれの漢文の原文を見ると否定形の -l ti- は概ね漢文の「不」、「莫/勿/毋」に対応し、否定形の -l kesi- は「不可」に対応している。以上の結果から、-l ti- よりも -l kesi- の方が「当為性」が強いと考えられる。

[A-5]

コーパスを用いた現代日本語における「が／を交替」の実証的研究

佐野 真一郎, 南部 智史

現代日本語は、特定の動詞（「好き」、「嫌い」、「出来る」、「分かる」、「欲しい」、「一たい」、可能形（「れる／られる」など）に導かれる述部において、目的語の主格・対格標示が交替する「が／を交替」現象を示す。当現象には、動詞や名詞の語彙的性質、他動性といった意味的な要因、隣接性などが影響を与えているということが主張されているものの、「が／を交替」現象の実態を包括的に捉えるには至っていないのが現状である。そこで、本研究では大規模均衡コーパスを用いて、「が／を交替」現象の実際の言語使用における分布と、それを統御する要因を数量的に明らかにすることを目的とした。数ある（潜在的）要因の中で、著者の生年、レジスター、隣接性、述部の種類（願望形・可能形の違い、動詞の単一・複合の違い、主節・従属節の違い）の影響について検証し、これらが主格・対格の選択に影響を与えていること、またそれらの影響の仕方を実証した。

[A-6]

大正・昭和前期の「が／の」交替に関するコーパスを用いた研究

南部 智史

本研究では大正・昭和前期の「が／の」交替の使用状況を定量的に調査し、主語表示「の」の使用の減少という変化について言語的側面から考察する。データには大正・昭和前期の講演・演説等が録音されている SP 盤レコード「岡田コレクション」の文字化資料を用いた。分析の結果、発話年・生年の観点から「の」の使用の減少傾向が観察された。具体的な変化の動向としては、例えば述部が明示的な連体形である場合には主語表示「の」の使用率が非常に高かったが、このような述部の使用は現代日本語では見られないことから、動詞の明示的連体形の消失は主語表示「の」の減少を加速させた一因であると考えられる。また、現代日本語にはない準体句にも主語表示「の」の使用が多く観察されたが、このような「の」選好環境の消失が変化を推し進めたという見解は統語論の観点から支持されることを指摘する。

[A-7]

大主語構文におけるガ・ノ交替：長崎方言からの考察

猿渡 翌加

肥筑方言では大主語のように vP の外にあるガ格項がノに交替しないという先行研究の指摘(Kato 2007)があるが、本発表では大主語が(1)のように標準語のハの解釈になり C 要素が付随する場合に、長崎方言ではノに交替することについて考察する。全てのハ句がノに交替するわけではなく、TopP の指定部に基底生成するハ句や目的語が主題化した場合はノに交替しない。したがって、ノの認可条件として、ガ格項であり、(2)の構造のように C 要素「とよ／とばい」(Finite の「と(標準語の「の」)」+Force の「よ／ばい」)よりもノ句が構造的に低い位置に基底生成する必要があることを主張する。

(1) 太郎の (かなり) 背の高かとよ。(太郎は (かなり) 背が高いんだよ) [長崎方言]

(2) [_{ForceP} [_{FinP} [_{TP} [_{AP} [_{DP} 太郎の背の] [高か(=A)] T] とよ]

[A-8]

日本語のガ・ノ交替の統語論と意味論 —ドイツ語との対照を交えて

伊藤 克将, 森 芳樹

日本語には、一部の従属節において主語にノ格が付与される現象があり、ガ・ノ交替と呼ばれている。主語にノ格が付与された従属節の構造に関して、Watanabe (1996) や Hiraiwa (2001) のように主節と同じ大きさの投射を想定する立場と、Miyagawa (2011) のように C 投射の欠如を想定する立場がある。前者の立場の根拠のひとつとして、定性の文を導く補文標識であるコトに導かれた節内でガ・ノ交替が可能であることが指摘されている。本発表ではまず、コト節を用いた命令文と、ドイツ語の不定詞命令文との対照などを通して、コト節に C が投射されない場合があることを示す。このことから、コトを定性の文を導く補文標識として一様に分析すべきでないことを主張し、Miyagawa (2011) の立場を支持する。その上で、ガ・ノ交替と、ドイツ語の連体節としての dass 文・zu 不定詞句の交替に見られる意味的な並行性を示し、C 投射の存在によって、現前性 (actuality, Lewis 1970) の表出が可能になることを主張する。

[B-1]

終助詞「ね」の可変性と心の理論：事象関連電位による探索的研究

木山 幸子, リヌス フェアドンスコット, 熊 可欣, カリンカ ティマー, 玉岡 賀津雄

本研究では、日本語の終助詞「ね」の特殊な用法に対する個人の柔軟性が心の理論の能力によって説明できるという予測について、事象関連電位 (Event-related potentials: ERPs) を援用した 2 回の実験を通して探索的に検証した。分析の結果、AQ の得点が高い (心の理論の能力が低い) ほど、適切性の低い「ね」の用法に対して、脳の後部により強い N170 成分が認められた。N170 は、しばしば顔認知課題から検出される社会的相互作用を反映する成分と考えられており、自閉症児に強く現れることでも知られている (Coffman, et al., 2013 等)。本研究の 2 つの ERP 実験で一貫して得られた N170 からは、心の理論の能力が不十分であると、終助詞の用法を固定的に捉えているため、特殊な用法に強い違和感を生じることになるという解釈が導かれる。反対に、心の理論の能力が高いと、特殊な「ね」であってもそこに付与された話し手の心的態度を柔軟に把握しようと努めるので、即時的な違和感は強くないのかもしれない。

[B-2]

Semantic LAN 現象からみる日本語の文理解モデル

矢野 雅貴

事象関連電位 (ERP) を用いた研究では、意味的に不自然であるが統語的逸脱を含まない文 (The meal was *devouring*...) に対して P600 効果が観察されることが報告されている (Semantic P600 現象)。近年提案されている Multi-Stream Models では、この現象を説明するために、(形態) 統語的に非曖昧な文であっても、意味処理が統語処理に影響すると仮定する。本発表では、まず Semantic P600 現象に関する先行研究の問題点を指摘し、Multi-Stream Models の妥当性を検証する方法として新たな研究方法を提案する。次に、それに基づいて実施した三つの日本語 ERP 実験の結果から、モデルの妥当性について議論する。

[B-3]

日本語の分裂文処理における確率論的要因の検討

カフラマン バルシュ, 広瀬 友紀

これまで日本語の主語分裂文と目的語分裂文の処理過程について調べた研究では、前者の方が後者より処理負荷の高いという結果 (Kahraman et al. 2011) と、後者の方が前者より処理負荷が高いという正反対の結果が報告されており (Yano et al. 2014)、分裂文の処理負荷が起因する要因について意見が相反している。本研究では、「予測可能性」と「構文頻度」に着目し、関係節の処理との比較に基づいて、日本語の分裂文の処理に影響する確率論的要因について検討するために、文完成課題、自己ペース読文実験、及び視線計測実験を行った。その結果、関係節と分裂文において目的語が空所になっている構文の方が、主語が空所になっている構文より処理負荷が高いことがわかった。この結果は Yano et al. (2014) の結果と一致しており、主語分裂文の方が目的語分裂文より頻度が高いため、目的語分裂文の処理の難易度を「構文頻度」で捉えられる可能性が高いことを示唆している。

[B-4]

日本語の二重目的語構文における文理解の難易度について

—二格名詞の有生性に着目して—

滝本 宮美, カフラマン バルシュ, 広瀬 友紀

日本語二重目的語構文の処理研究では、「がにを」語順が「がをに」語順より処理負荷が低いとされ、前者が基本語順であることの証左とされている。一方、二格名詞の意味役割 (着点) が所有者 (有生名詞) を表す場合はヲ格名詞より先に、場所 (無生名詞) の場合はヲ格名詞の後が基本語順であるとの主張がある (Ito, 2007)。本研究では、二格名詞の有生性と二重目的語構文の関係を検討するため自己ペース読文実験を行った。ターゲットとなる二重目的語構文は補文として、条件間で共通する主文に埋め込んで呈示された。その結果、二格名詞が有生の場合ターゲット埋め込み文中では条件間の差はみられなかったが、後続する主文動詞部分にて、ターゲット文の二格名詞が有生の場合「がにを」語順の方が「がをに」語順より読み時間が速く、一方無生の場合はその逆となった。これは二格名詞の有生性が二重目的語構文の語順またその処理負荷に関わることを示す。

[B-5]

熊本方言における接辞-ar について

坂井 美日

熊本方言には「干さる (hos-ar-u)」「開かる ak-ar-u」のように、接辞-ar をとる動詞形式（以下「-ar 形」。-ar 形を述部とする構文を「-ar 構文」）がある。本発表では、形態面・意味面・統語面を整理し、-ar が単なる自動詞化接辞ではないことを示し、-ar 構文が「逆使役(anticausative)」の構文であることを示す。形態面では、-ar 形自動詞は使役化できないことを示し、当該の-ar が自他対応動詞の/ar/とは異なると主張するとともに、その特徴が-ar の機能に起因すると論じる。意味面では、語彙的アスペクトの観点から、-ar 形自動詞に対応する他動詞が全て「主体動作＝客体変化動詞」であり、-ar 形自動詞はその変化の対象を主語とする「主体変化動詞」であることを示す。二者は動作主の有無の面に対立し、前者から後者を派生する-ar の操作は、動作主を背景化するものと言える。そして統語面では、他の自動詞化構文（受動文や、テアル構文等）と比較をしつつ、-ar 構文が動作主の項と共起できないことを示す。

[B-6]

北海道方言ラサルの認可条件再考

並木 翔太郎

本発表は、北海道方言の自発接辞（ラ）サル付加（例：スイッチが押ささった。（＝無意識に電源を{入れて/消して}しまった。））の成立条件について、当該接辞の意味・機能的観点から考察する。佐々木（2007）などの観察のとおり、述語が行為の結果としての対象の状態変化を表す場合（丸を書く、手袋をはく、など）に、ラサル付加の容認度が高くなる。しかし、「割る」や「切る」などの他動詞群は反使役化するとラサルが付加できない（割らさる vs.*割れらさる、切らさる vs.*切れさる）。さらに、「温める」や「上げる」などの他動詞群は先の条件を満たしているが、ラサルの付加が容認されず、脱使役化する必要がある（*温めらさる vs.温まらさる、*上げらさる vs.上がらさる）。本発表では、(i) ラサルは「意図性の抑制」を主たる機能とし、(ii) 当該機能によって語幹の語彙的特性が損なわれない場合にのみ付加が成立すると主張する。本発表では、ウズベク語において、述語に所有人称接辞が付きかつ属格主語ではない用例を考察対象とすることによって、属格主語が許されない条件を明らかにすることを目的とする。

[B-7]

琉球与那国語の敬語体系

山田 真寛

与那国語は日本語や他の琉球諸語と同様、文末に現れる動詞の接尾辞か一部の動詞の特殊形式によって、文中に現れる項の指示対象への待遇を表す。日本語の敬語体系は菊池(1997)をはじめ多くの記述があるが、日本語との系統関係が唯一証明されている琉球諸語の敬語体系は未記述の部分が多い(重野 2011 & references therein)。また与那国語を含む六つの琉球諸語が消滅危機言語としてユネスコに認定されているが、若い話者や受動的言語知識を持つ者の言語使用が妨げられている一因として現代日本語共通語と異なる敬語体系があげられる。本発表は与那国語の敬語体系の記述によって記述・再活性化に貢献するとともに、与那国語は日本語と同じ日流語族の言語でありながら、Potts&Kawahara (2004)などで提案されている現代日本語共通語の敬語表現とは異なる側面に言及する敬語体系を持つことを示す。

[B-8]

(Non)-Exhaustivity of *Dake* 'only'

Satoshi TOMIOKA

It has been observed (cf. Kuno 1999, Yoshimura 2007) that, of the two Japanese expressions of *only*, *dake* is 'less negative' than *shika...nai*. In this talk, I will argue that (i), unlike the English *only*, *dake* does not encode the exhaustivity as such (i.e., there is no negative quantification over non-weak alternatives in the sense of Fox 2007), and that (ii) the exhaustive-like interpretation is due to the maximality in the meaning of *dake*, which is essentially a degree expression (cf. Futagi 2004). It will be shown that the proposed analysis is supported by other phenomena, such as the interpretation of *dake* in conditionals and other degree-exhaustivity connections found in such expressions as...*kagiri/kagiru* 'limit(ing)', ... (*k*)*kiri* 'cut/end'.

[C-1]

「視点固定型/移動型言語」の議論の再検討

古賀 悠太郎

「視点」に関する（日英・日中）対照研究の場では特に、「日本語（他言語）は視点固定型言語か、視点移動型言語か」という問題は盛んに議論される事柄の一つである。たしかに、幾つかの現象は「X語は視点固定型/移動型言語である」と考えることで説明がつく。

しかし、本発表では、「固定型/移動型」の議論について再検討を行う。そして、その結果として、(i)それぞれの先行研究が「違うところ」（＝同じ言語の異なる現象，同じ現象の異なる側面）に注目している，(ii)「固定型派/移動型派」のどちらの立場でも合理的に説明できない現象も存在する，などの問題点を指摘する。

また、「固定型/移動型」の議論に代わって「ヒトの文字通りの視点の構造（＝視点人物・注視点・視座・視野・見え）」という考え方を提案し，これによって日中両語の複数の現象（間接受動文の発達度の差など）について統一的に説明することができるということを示す。

[C-2]

インドネシア・フィリピンの諸言語における情報構造の分析

内海 敦子

本発表では西マラヨ・ポリネシア諸語のうち、インドネシアやフィリピンに広がっている諸語において情報構造を指示するマーカーについて述べる。特に、①名詞句の種類、②態の種類、③語順の三点に焦点を当てる。

①の名詞句に関しては、Gundel et al 1993 の *givenness hierarchy* などの分類を参考に *determiner* や *demonstrative* が NP に付加した場合の分析を行う。

②の態に関しては、多くの言語で Actor Voice(AV)の目的語によって新情報が導入されることが一番多く、Undergoer Voice(UV)の文によって導入されることは稀である。

③については、名詞句の *givenness* によって異なる語順が好まれることをデータで示す。例えば Bantik 語の場合は無標の語順が SVO のところ、新情報を表す NP が主語になるときは VOS の語順が好まれる。

[C-3]

共同注意の確立過程における聞き手の負荷と話し手による指示詞の質的素性の選択

平田 未季

本発表では、話し手による指示詞の質的素性の選択に関わる要因を明らかにするため、ガイドが町案内をする全 50 分の自然談話から、話し手が複数の指示形式を用いて一つの対象へ聞き手の注意を誘導していく場面を 10 例抽出した。この 10 例には以下の 3 つの共通する傾向が見られた。(i) 共同注意確立行動の開始部で聞き手の注意を転換させる過程では空間を指す「-コ」, 「-チラ」が選択される, (ii) 指示対象に注意の焦点を絞っていく調整の過程では実質名詞を伴う指示決定詞「-ノ」や図像的 (iconic) ジェスチャーを伴う指示副詞「-ウ」が多用される, (iii) 「-レ」は意図する対象に共同注意が確立した時点もしくはその後を選択される。以上から、話し手による質的素性の選択は、指示対象の内在的特性 (intrinsic property) のみならず、特に共同注意の確立が困難な場面において、聞き手の負荷を減らし、より効率的に共同注意を確立させようという伝達的な意図に基づいて行われていることが分かる。

[C-4]

英語の結果構文の認知プロセス —焦点連鎖の観点から—

菊池 由記

発表では、非下位範疇化目的語をとる結果構文 (以下 NSOR) を扱い、特にその解釈に関わる認知プロセスを考察する。Rappaport Hovav and Levin (2001) は、*They drank the pub dry* では、動詞とそれに後続する名詞句の語用論的關係により、パブが状態変化を受けると述べ、パブの状態変化を「酒がなくなる状態」と見なしている。この考え方は、パブで酒を飲んだ結果として、パブまたは酒が “dry” になるという解釈が得られると予測するが、**The pub was/became dry*, **The alcohol was/became dry* のように、名詞句 *the pub*, *the alcohol* は形容詞 *dry* と叙述関係を持つことができない。本発表では、*They drank the pub dry* の結果述語 *dry* は容器の結果状態を示すことを明らかにした上で、Langacker (1999) の焦点連鎖に沿って NSOR の適切な意味解釈が得られることを主張する。この分析は、NSOR の意味解釈のあり方が制限の無いメトニミー拡張ではなく、焦点連鎖に基づくメトニミー拡張によって保証されることを主張するため、メトニミー拡張のあり方について、焦点という概念が必要であることを示唆する。

[C-5]

Phonetic Properties of Nuclear Prominence in Japanese

Yoshihisa KITAGAWA, Shinichiro ISHIHARA and Shigeto KAWAHARA

We attempt to provide *quantitative confirmation* of the presence of *nuclear prominence* in Japanese, presenting the results and their analyses of a phonetic experiment. The experiment was designed to test the hypothesis that the phrase immediately preceding a verb in Japanese receives phonetic prominence regardless of its syntactic category or grammatical function, and regardless of the involvement of semantic focus in the sentence.

Our stimuli consisted of 27 sentences, involving 3 different *word orders* of pre-verbal NPs (Nom-Loc-Dat-Acc, Nom-Loc-Acc-Dat, Nom-Dat-Acc-Loc) and 3 different *information packaging* (declarative sentences involving all new information, interrogative sentences involving a verum focus realized on the verb, and declarative sentences involving the last NP as a constituent focus answering a wh-question), and 3 items per condition.

[C-6]

日本語複合語アクセント規則の違反に関わる ERP 研究

小林 由紀, 広瀬 友紀, 伊藤 たかね

本発表では事象関連電位(ERP)を指標として、日本語複合名詞生成に関わるアクセントの違反に対する反応を検討した。ターゲット語として頭高型 3 モーラ(HLL)の単語とそれらの単語を前部要素とした複合語を用意した。複合語の前部要素は複合語アクセント規則(CAR)により LHH と発音される。東京方言の話者がこれらの単語と複合語の前部要素が(1)HLL, (2)LHH と発音されるのを聞いている時の ERP を計測した。複合語の(1)は CAR の違反, 単語の(2)は語彙記憶の違反, 複合語(2)と単語(1)が正しいアクセントである。複合語の(1)は(2)と比較して前頭中心に陰性波が出現し, 単語刺激の(2)は(1)と比較して全頭の広い範囲で陽性波が出現した。同じアクセントの違反であっても, 違反の性質によって異なる成分が検出されたことにより, 2 タイプの違反が異なる脳内処理を受けていることが示唆される。

[C-7]

三重県尾鷲方言のアクセント体系における‘第三の式’の発生について

平田 秀

尾鷲方言のアクセント体系は、下げ核および発表者がα式(上昇式)、β式(早上がり式)、γ式(平進式)と呼ぶ3つの式によって記述される。音調の下がり目が下げ核によって、文節全体の音調の方向が式によって定められる。

本発表では、前述の3式のうちβ式が歴史的にα式の下げ核をもつ型から下降が遅れる音変化によって成立した式であるとする仮説を述べる。論拠は以下の4点である。1. α式・γ式では下げ核なしの語が存在するが、β式は下げ核なしの語が得られず、下げ核の存在が前提の式であると考えられる。2. α式・γ式は拍数を問わず語例が得られるが、β式は4拍語以上しか得られず、同方言に元来あった式でないことが示唆される。3. α式の名詞+「こそ」などの2拍助詞の文節がβ式になる例がみられ、α式 > β式の変化の仮説と合致する。4. 県北部の鈴鹿方言と対照して、前述の音変化の仮説と矛盾のない対応がみられる。

[C-8]

八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み
—その韻律範疇と下がり目の出現条件—

松森 晶子

八重山諸島の黒島方言は、特定の条件のもとで3種の型の区別が現れる「3型」アクセント体系である。発表ではその3種をA型、B型、C型と呼び、このうちC型名詞に特に興味深いアクセント交替が見られることを報告する。

C型の3モーラ名詞に1モーラの助詞が続くと usji] nu... (臼が～) のように名詞末に下がり目が出現するが、より長い助詞が続くと usji kinna... (臼よりも～) のように文節全体が「低平調」となる。また同じC型の3モーラ以上の単純名詞には、何モーラの助詞が後続してもかならず下がり目が出現するが、その下がり目の位置が後続する助詞の長さによって変わってくる。

本発表では、黒島方言には①(モーラや音節より大きい)韻律範疇が存在し、②その範疇の全体のモーラ数が「3モーラ以上」という条件のもとで、③その次末モーラに下がり目が出現、というような仕組みがあるとして、上述のような型の交替の原因を説明する。

[D-1]

タガログ語の *naka*-結果状態構文

長屋 尚典

タガログ語には接頭辞 *naka*-を用いて結果状態を表現する構文がある。この言語のヴォイス現象が注目を受ける一方で、この構文はほとんど研究がなく、基本的な記述を欠いている。そこで本発表ではこの *naka*-を用いる述語の形と意味について分析する。本発表の主な観察と主張は次の通りである。第一に、*naka*-構文は結果状態、すなわち、ある人やモノについて、状態変化が起こり、その結果の状態が維持されていることを表現する。第二に、この構文はどのような結果状態でも表現できるわけではなく、位置変化や姿勢、服装、表情など一時的で可逆的な状態変化の結果状態のみを表現する。不可逆的で恒常的な状態変化の結果は単純な形容詞によって表現される。*naka*-結果状態構文はタガログ語の述語体系の重要な一角を占めているのである。最後に、形式的に見た場合、*naka*-結果状態述語は活用しない状態述語である点で形容詞に近いが、*maging* の補文として出現できない点では動詞に近い。

[D-2]

ハンガリー語における *-vA* 構文の解釈について

梅田 遼

現代ハンガリー語には生産的な受動形が存在せず、受動の意味を表すためには種々の受動代替表現が用いられる。本発表ではそれらの表現のうち、副詞的分詞である *-vA* 分詞が述語になる構文 (*-vA* 構文) の解釈について考察する。

-vA 構文は共起する動詞によって以下の 2 つに分けられる。1) 存在・コピュラ動詞 *van* と共起する場合 (*-vA+van* 構文)、2) 状態変化動詞 *lesz* と共起する場合 (*-vA+lesz* 構文)。先行研究においては *-vA+van* 構文を受動構文とみなす立場もあるが、本発表では、*-vA+van* 構文は受動構文ではなく、結果状態構文として解釈されるべきであり、*-vA+lesz* 構文こそが (出来事の) 受動構文として解釈されるべきであると主張する。この分析の根拠として、時間副詞と共起した際の解釈、非対格動詞から形成可能であるか、動作主の表示は可能であるか、他動性との相関はあるか、以上 4 つの観点を検討する。

[D-3]

文法化における論理的意味と非論理的意味

— 「行く」「来る」の文法化を例に—

新井 文人, 日高 俊夫

本研究は、日本語の「行く／来る」から「V テイク／V テクル」への文法化の動機づけに関する意味論的考察である。従来、後者 2 形式については多義性（森田 1968, 今仁 1990 他）、意味構造の形式化（中谷 2008, 日高・新井 2012, Nakatani 2013）、文法化度合いに関する制約条件（Shibatani 2007）等が研究されてきたが、「行く／来る」からの文法化の根源的理由に関する考察は少ない。本発表では、「行く／来る」から「V テイク／V テクル」への文法化を、Roberts and Roussou (2003) における(1)論理的意味に当たる特質構造（Pustejovsky 1995 等）内の形式役割の値（語の時間的特性、距離関数、視点関数が規定するアスペクチュアリティや直示性）の保持、(2)非論理的意味に当たる構成役割の値（移動主体や経路を含む語彙概念構造の内容）の消失と捉える。

[D-4]

程度性を含む形容詞の意味処理過程に関する研究

田村 彩香, 酒井 弘

広島は夏は暑い。という文は、人により真偽判断が異なるだろう。このような形容詞は意味特性として「程度性」を含み、比較があらわになっていない形容詞文は、潜在的な規準との比較の上で相対的な判断がなされているとされている。（国立国語研究所, 1987）

Rips & Turnbull (1980) は心理言語学的観点から、このスケールの情報を持つ形容詞（例：small）と持たない形容詞（例：straight）について、潜在的に自分の中に持っている知識で文を処理するモデル（貯蔵モデル）と、文を見たときに潜在的に自分の中に持っている知識と比較をしてスケールの計算を行うモデル（計算モデル）を提案した。

本研究では、スケールの情報の有無に応じて計算モデルと貯蔵モデルのどちらが支持されるのか、自己ペース読文課題を用いて調査を行った。結果、日本語でもスケールの情報を持つ形容詞で計算モデルが支持されることが示唆された。

[D-5]

現代日本語における進展的状態変化自動詞の事象投射構造

小西 正人

事象・対象・時間を連関した Jackendoff (1996)の構造保持束縛理論を発展させ、限界性などの現象を適切に扱える装置とした岩本編(2008)の事象投射理論では、移動事象については経路を投射構造に取り込むことにより事象の限界性と経路の有界性を関連づけたが、状態変化事象、特に進展的状態変化事象分析では移動事象および程度スケールとの関連が明示的ではない。そこで本発表では進展的状態変化自動詞「広がる」を例に、移動事象の経路に対応する部分に程度スケールを充てることにより、進展的状態変化事象における「移動事象との共通性」および「程度スケールとの関連性」を事象投射構造内で捉えることができること、また変化様態を特定する「ゆっくり広がる」では連続的变化となるのに対し変化前後の差を表す「より広がる」では二値的变化となり、また変化の差分を表す「6m 広がる」では両義的となることを事象投射構造を用いて示す。

[D-6]

習慣文のアスペクト形式と意味解釈

—単純ル形とテイル形の対立を中心に—

鈴木 彩香

本発表では、日本語の習慣文における単純ル形とテイル形の対立に焦点を当て、それらの意味解釈のメカニズムの違いについて論じる。はじめに Rimell (2004)の先行研究に従い量化副詞が顕在的に存在する場合と存在しない場合を区別すべきことを指摘し、「一昨年から」といった期間限定の副詞との共起関係、裸名詞主語の存在／総称解釈(Diesing 1992, Ishii 1991 他)といった現象から、単純ル形習慣文とテイル形習慣文の違いを明らかにする。そして、単純ル形はアスペクト強制(coercion, de Swart 2000 他)によって「属性文」になり得るのに対して、テイル形は事態の反復による「出来事文」にしかないと考えることで、それらの現象に統一的な説明が与えられることを主張する。

[D-7]

Japanese Modified Numerals and Ignorance Inference

Hitomi HIRAYAMA

This study investigates how (modified) numerals in Japanese interact with particles *wa* and *ga*. Using Kuroda (2005)'s analysis according to which *wa*-marked sentences express a categorical judgment while non *wa*-marked sentences express athetic judgment, and, in addition, adopting recent literature on comparatives (more than X) and superlatives (at least X) in English, I claim that the contrast between comparatives and superlatives in ignorance inferences is connected to the contrast between *wa* and *ga* in Japanese. I also argue that comparatives and superlatives are still semantically different in Japanese too in that only superlatives mention an upper or lower bound in ignorance inferences.

[D-8]

手話言語の動詞一致のメカニズム

川崎 典子

世界の手話言語には、(主語と) 目的語の指示対象に応じて手の向き・移動の方向が変わる動詞(一致動詞)が観察されることが知られており、様々な分析が提案されているが、いずれも以下の観察すべてを説明することはできていない。

- A. どの手話言語にも一致現象が見られる。
- B. 一部の動詞だけに一致が観察され、目的語が有生 *animate* である動詞に集中している。
- C. 主語ではなく目的語と動詞が一致するのが一般的で義務的である。
- D. 一致の表出形は、対応する代名詞の表出形と同じ位置・方向を使う。

本発表では、次の2つの要因を踏まえた最適性分析を提案し、A~Dの原因を明らかにする。

1. 2つの項がともに有生名詞句である動詞は、項削除が起きると解釈に多義性が生じる。
2. 手話言語では同時に認識される音韻情報が多いため、音節数が多くなるほど文処理のもたらす短期記憶の負担増大が著しい。

[E-1]

Phase-Cancellation by Pair-Merge

Samuel D. EPSTEIN, Hisatsugu KITAHARA, T. Daniel SEELY

Chomsky (2014) discusses a long-standing problem regarding unvalued *phi*-features ($u\text{Phi}$) on bridge verbs. Consider the matrix v^*P phase of "John thinks that he will win" (where R is a root THINK, v^* is a phase head and verbal categorizer, and EA is the external argument):

(1) [EA [v^* [$_{\alpha}$ R [$_{\beta}$ C]]]]

In (1), R inherits $u\text{Phi}$ from v^* . However, the search domain of the probe R , namely the edge of β , (given PIC) contains no Goal that R can agree with; hence, a valuation failure results, wrongly predicting crashing in such cases. We present a natural solution, appealing to no new mechanisms beyond freely applied set-Merge and pair-Merge.

[E-2]

Extraction out of English VP-ellipsis Sites: The Overt/Null Contrast

Yuta SAKAMOTO

The PF-deletion analysis has been widely entertained for English VP-ellipsis based on the possibility of overt *wh*-extraction out of its domain (cf. Aelbrecht 2010). However, Bošković (2014) observes that such extraction becomes impossible if elided VPs are phases. In this presentation, I show that covert extraction, e.g. QR, is possible even in Bošković's case, and argue that the overt/null contrast regarding extraction out of English phasal VP-ellipsis sites receives an explanation if phasal ellipsis is implemented by (modified) LF-copying. Also, I discuss another instance of phasal ellipsis, i.e. Japanese argument ellipsis (cf. Oku 1998), where overt extraction is reported to be impossible (cf. Saito 2007), showing that covert extraction is in fact possible as the proposed analysis correctly predicts.

[E-3]

併合が探査を必要とするとき

後藤 亘

Merge(X, Y) = {X, Y}は、その出力の label と入力 $n=2$ をどのように決定するのかという問題をはらんでいる。これまで、《ラベルの問題》は広く議論されてきたが、《入力(n)の問題》はほとんど議論されてこなかった。しかしながら、External Merge による lexicon への接近や、Internal Merge による複雑な統辞体(SO)からの抽出には、 $n>2 \rightarrow n=2$ が決定的に関与しているということを考慮すると、 n の問題は Merge の明示的な定式化にとって大切な問題になる。そこで本発表では、まず演算上の効率性の観点から「Merge は $n>2$ のとき search を必要とする」と提案する。さらに、作業空間の最小化の観点から「search は unlabeled SO のところで止まり、そこから $n=2$ にかなう相手を捜す」と提案する。このような《search による Merge の最適化》と《label による search の最小化》は、 n の問題に対して最適解を与えるのみならず、言語システムの簡潔性と効率性を増大させる効果があると論じる。提案システムの帰結の一つとして、日英語の抽出性の違いが容易に説明されることを示す。

[E-4]

日本語の時の副詞節の構造に関する考察

小田 博宗

一般に時の副詞節は CP 構造を持ち、時の reference point を示す演算子が TP 内部から CP 指定部に移動することで派生されるとする operator movement analysis がある(Larson 1990 他)。一方日本語については、時の副詞節が CP より小さい構造を持つとする truncation analysis (Endo 2012)と、同節が CP 構造を持ち、特定の主要部が C まで移動することで派生されるとする head-movement analysis (Endo and Haegeman 2014)が提案されている。

本発表では、演算子移動が関わっているとされる時の reference point の多義性の有無が、head-movement analysis では統一的に説明されないことを示し、truncation analysis が支持されることを示す。さらに、この truncation analysis に基づき、統語論で扱われてこなかった「前/後」節の構造分析を提示し、「時」節と「前/後」節が示す、時の reference point の多義性における差異を包括的に説明する。

[E-5]

話し手・聞き手構造による force の決定

松田 麻子

本発表は、話し手・聞き手という発話参加者の CP 領域における統語的位置づけの明確化によって、Rizzi (1997) 以来注目が高まる CP 構造の精緻化に資する。発話の力 (force) が明示的に表れる日本語の命令文、勧誘文等の主語人称制限の考察から、言語全般に通ずる CP 構造を提案する。先行研究では、CP 内の特定主要部にまず force が指定され、それに応じて主語に人称制限が課されるとの見方が中心的である。これに対して本発表では、CP 内に「話し手」「聞き手」という二段階の投射を想定し、T 主要部が「話し手」「聞き手」各主要部と段階的に一致していくことで force が決定すると提案する。このことで、経験的には、「みんな、進学しろ!」といった命令文の主語の指示対象には、聞き手だけでなく第三者が含まれ得ることなどが容易に説明可能となる。また、理論的には、ミニマリズムが想定するボトムアップ派生に忠実な分析となる。

[E-6]

ロシア語名詞句の統語構造: 束縛現象からの検証

宮内 拓也

冠詞のないスラヴ語の名詞句の構造についての立場は、NP であるか DP であるかで二分されている。本発表では、Kayne(1994)の理論、Despić(2013)の方法論を用いて、束縛現象からロシア語における名詞句の最大投射は NP であることを示す。Kayne(1994)によれば、名詞に前置される所有者は PossP の指定部に位置しており、DP に支配されている。そのため、この DP は所有者による同一指標の名詞句への(Kayne 1994 で定義される) c 統御を妨げ、束縛原理は守られる。ロシア語においても DP が投射されるのであれば、同様に c 統御は妨げられると予測される。しかし、ロシア語の場合は、所有者が同一指標の名詞句を束縛し、束縛原理の違反を引き起こす。これはロシア語において DP が投射されていないことを示している。また、所有者を被所有者に後置させる所有構文では、所有者はそれと同一指標の代名詞を束縛せず、文法的となる。この文法性は上記の議論から矛盾なく予測され得る。

[E-7]

特殊な性質を示す否定極性項目「何も」
～「私は何もテキーラが飲みたいのではない」の「何も」について～
CP 地図化の観点からの分析

渡辺 敏久

否定極性項目(Negative Polarity Items: NPI)である日本語の「何も」は通常東京方言で第二、第三モーラにピッチアクセントが置かれるが、本発表では第一モーラにピッチが置かれる奇妙な「何も」を対象として扱う(例:「私は何も酒が飲みたいのではない」: 以下 S(trange)NPI)。SNPI は特異な統語的性質を有する。例えば、命令文中で生起しない(*おまえは何もそんなに酒をがぶがぶ飲むな!)。この現象は Nakao and Obata (2009)で 2 例ほど簡単に言及された程度で、詳細な説明は与えられていない。そこで本発表では SNPI 認可の仕組みを、SNPI が焦点句構造の付加詞位置(統語上非常に高い位置)に基底生成されると仮定することで説明しようとする。SNPI の統語上の特異性は仮定により大部分説明される。この結果、CP 構造内の焦点句 FocP の存在が裏付けられるであろう。

[E-8]

幼児による「しか…ない」の習得について

山腰 京子, 近江 郁子, 池田 佳菜子, 大庭 明莉

Crain et al. (1992)等で幼児の 'only'の解釈が調査されているが、日本語の「だけ」に関しても幼児が文全体に関連づける場合もある(S(entential)-scope 解釈; Sano (to appear))。本研究において「NP しか...ない」の S-scope 解釈の実験を 4～6 歳台の幼児 19 人に行ったところ、幼児の S-scope 解釈は 38 のうち 4 回答のみ (10.5%) であり、Sano の「だけ」の S-scope 解釈 41.6% よりもかなり低かった。「だけ」は文末に現れ TP まで領域が広がるが(Kishimoto 2009)、「NP+しか」は LF で NegP の指定部へ移動し (Takahashi 1990, Aoyagi and Ishii 1994, etc.)、その領域は TP まで及ばない。従って今回の結果は「しか...ない」の領域は NegP であり TP まで及ばないと幼児が習得していることを示唆する。

[F-1]

アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の解釈について

三村 竜之

伝統的にはアイスランド語の無声歯茎ふるえ音(便宜的に[r0])は子音連結/h/+r/と解釈されてきたが、綴り字(hr)を論拠としており説明力に欠ける上、-rskのような[r0]を含む子音連結がアイスランド語では不適格な音節(*-VCCCC)として分析されてしまう。また近年の研究では、[r0]は後続子音の素性 spread glottis([+/-sg])による/r/の無声化と解釈するが、[-sg]である/s/が後続する[r0]や(そもそも子音が後続しない)語末の[r0]は説明できない。そこで発表者は、先行研究が見落とししていた句や文における[r0]の振る舞いを精査し以下の結論を導く：i) marka-margaのような最小対から/r/とは別に/r0/を設定する；ii) 語頭及び語中の[r0]はr0が実現したものである；iii) 語末の[r0]は発話末尾における/r/の無声化である。

[F-2]

英語の強勢付与における不透明性：調和的直列理論と含有理論

橋本 大樹

英語の音韻体系では、どの品詞・どの位置であっても、長母音（緊張母音と二重母音のことを指す）は強勢を引きつける：aróma, muséum, ballóon, agrée, kangaróo等。しかしながら一部の語彙において、母音直前位置にある長母音が強勢を引きつけないことがある：álien, ánnual, árchaism, bénnoin, mánnia等。つまりこれらの語彙においては“長母音は強勢を引きつける”という音韻現象が適用不全になっている。この不透明性を捉えるために、Hogg and McCully (1987: 13) は“alien”の様な語彙の次語末の母音は基底形では短く、強勢付与の後に長母音化するという規則順序に基づいた分析を提示した。しかし規則の順序を想定しない最適性理論の枠組みでは、この説明は受け入れられない。本研究では不透明性に一定の説明力を持つ2つの最適性理論の枠組み（調和的直列理論・含有理論）を用いて、“alien”のような語彙に見られる強勢付与の不透明性の分析を試みる。その際に、この現象は調和的直列理論では捉えられず、含有理論では上手くいくことを明らかにする。

[F-3]

スワヒリ語動詞の反復形 —機能と派生の条件—

牧野 友香

スワヒリ語の動詞には、動詞語幹を繰り返す以下のような「反復形」という派生形式があり、動作の反復、継続、強化などを表し（中島 2000、Ashton 1947 他）、非常に生産的である（Shadeberg 1992）とされてきた。

-piga-piga 「何度も打つ、軽く叩く、何度も殴る」

本発表の目的は、①先行研究で挙げられている用法と新たに見つかった用法を合わせて、反復形の中核的な機能を提示すること、②これまで考察されることのなかった反復形の派生の条件を考察し提示すること、の2つである。①については、先行研究で挙げられている用法と新たに見つかった用法に共通しているのは<複数性>であり、そこから動作の繰り返しや継続、強化、習性、同時多発性、度合いの進行などが表されることを説明する。②については、反復形を派生させることができるのは、終着点のない非限界動詞（コムリー 1988）に限られており、限界動詞は反復形を派生させることができないという説明を与える。

[F-4]

Event cancellation and telicity in Tagalog

Paul Julian SANTIAGO

This paper examines event cancellation in Tagalog and argues against the notion that undergoer focus constructions entail telicity based on the findings. In Tagalog, the acceptability of event cancellation varies according to the semantics of the verb and undergoer participant, presence of other grammatical devices, and context. It is found that result cancellation of most destruction verbs, hitting verbs, change-of-state verbs and transitive causatives is acceptable, although the acceptability depends on the nature of the undergoer (e.g. sentience) in some cases. Interestingly, some change-in-body-posture verbs and translational motion verbs allow the cancellation of the action itself regardless of transitivity. It is proposed that the strong correlation between telicity and transitivity is a matter not of entailment but of conversational implicature.

[F-5]

ブルシャスキー語の空間参照枠

吉岡 乾

本発表は、パキスタン北部のフンザ谷で用いられているブルシャスキー語における空間表現について、空間参照枠を中心にしての記述を目的とし、以下の二つの点を主張する。

一つは、ローカルな物体の位置関係などを表現する際には、参照物の向きに合わせた「固有的参照枠」が主に用いられる。参照物の形状や性質によっては、話者の向きに依拠している「相対的参照枠」を用いているかのように見受けられる表現もあるが、必ずしもそれも「相対的」とは言えず、寧ろ、参照物の方向に制限が掛かった「固有的参照枠」での表現であることを述べる。

二つ目は、ブルシャスキー語には「東西南北」を指す固有の語彙がなく、グローバルな地理関係を表現する為には「内・外・上・下」といった語彙を、話者の向きなどに依存しない「絶対的参照枠」として用いる。方角の語彙を持たないのは、彼らの生活空間が山間であり、移動可能な方向に強い制限があるためだと考える。

[F-6]

ヒンディ語の重層的格標示システム

中村 渉

ヒンディ語は、名詞語幹に付く屈折（主格，斜格，呼格）と後置詞的接語（主格，与格／対格，能格，属格）が構成する重層的格標示システムを持つ（主格接語はゼロ形式であり，主格以外の格接語を伴う場合，名詞語幹は斜格標示を受ける）。従来の見解には，屈折標識と後置詞が異なる格素性値のセットを持つとする見解と屈折標識のみを格標識と見なす見解がある。本発表は屈折標識と後置詞的接語は統語的格素性値（主格，与格，対格，能格，属格）を共有するが，統語的格素性が形態的格素性へ写像される際に格標示システムの変異が発生すると提案する。具体的には，格階層から派生される有標性制約と格素性の忠実性制約（MAX 制約，IDENT 制約）から構成される制約ランキングが統語的格素性から形態的格素性に至る写像過程に適用され，各制約ランキングの相違から，格屈折及び後置詞的格接語が構成する重層的な格標示システムが導かれると主張する。

[F-7]

ラワン語ダル方言における他動詞目的語の標示について
—対格後置詞=səŋが現れる要因—

大西 秀幸

ラワン語（ミャンマー、チベット＝ビルマ語派ヌン語群）の他動詞目的語（P 参与者）は項とそれを示す形式が、「目的語＝対格」のように一対一に対応せず、対格後置詞=səŋが絶対格（音声形式なし）の何れかで示される。

特に対格後置詞が選択される要因について、同方言の文法概説である Barnard (1934) は有生性の観点からすでに指摘しているものの、発表者は要因が「有生性」に限らないと考える。

対格後置詞が選択されるためには、以下の 5 つの要因が関わる。

1. P 参与者を指示する名詞句にとりたての後置詞がついていないこと（統語的要因）
2. 述語が特定のものでないこと（述語に関する要因）
3. 名詞句が代名詞であること（語類に関する問題）
4. P 参与者が定であること
5. P 参与者が有生であること

そして、対格後置詞が成立する最重要の要因は 1 であり、それらをクリアした環境でのみ 2、3 が関わる。さらにそれらの要因をクリアすることで、4、5 が関わるといえる。

[F-8]

カドゥー語諸方言におけるモークワン・カドゥー語の位置について

藤原 敬介

本発表ではモークワン・カドゥー語（チベット・ビルマ語派ルイ語群、ビルマ）の位置づけを、ルイ語群に属するチャック語、チャクパ語、カドゥー語諸方言、ガナン語などと比較し、音対応と語彙の分布を中心に検討した。その結果、従来カドゥー語の一方言とみられていたモークワン・カドゥー語は、文法形式の面ではむしろガナン語にちかいことがわかった。さらにルイ祖語の入破音に由来する音対応に注目すると、ルイ語群の諸言語は (A) 入破音をのこすチャック語、(B) 鼻音・流音で対応するチャクパ語、ガナン語、モークワン・カドゥー語、(C) 閉鎖音で対応するカドゥー語諸方言とにわかれることがわかった。そして、(B) のなかでは開音節での高母音のあとで閉鎖音が二次的に生じうるか否かによって (a) 生じうるチャクパ語とガナン語、(b) 生じないモークワン・カドゥー語とにわかれることがあきらかとなった。

[G-1]

Origins of alternation and variation: rethinking the “Urban Nahuatl” hypothesis

Mitsuya SASAKI

A recently proposed hypothesis on Classical Nahuatl is that it is a highly innovative urban koine which resulted from the intense dialect contact in Mexico-Tenochtitlan. The morphological changes which characterize Classical Nahuatl, however, resulted in the increase in irregularity and complexity, which is contrary to the prototype of koineization. A case study of the present-day situation of dialect contact in Highland Puebla, where Nahuatl dialects exhibit a totally different type of “mixture,” suggests that the complex paradigms of Classical Nahuatl have arisen within a relatively small, homogeneous group before the foundation of the metropolis; in Ixquihuacan, Highland Puebla, continuous dialect contact and the absence of prestigious variant motivate the coexistence of competing variations instead of paradigm-internal alternations.

[G-2]

宜蘭クレオールの動詞の形態素

簡 月真

宜蘭クレオールは、台湾東部の宜蘭県で使われている、日本語を上層、アタヤル語を基層、華語と閩南語を傍層とするクレオールである。本発表では、宜蘭クレオールの動詞の形態素について次のようなことを指摘する。①屈折形態素も派生形態素も日本語に由来しているが、その数は日本語より少ない。②否定辞の使用にはアタヤル語の「既然法」「未然法」の枠による影響が見られる。③-suru が動詞化、-rasyeru が使役化の接辞として用いられる文法化が観察される。④受身接辞も可能接辞もなく、受身は格助詞 ni で動作の受け手をマークし、可能は *dekiru* で語彙的に表すなどの単純化が見られる。また、いわゆる一段動詞のラ行五段化が観察され、類推によって不規則な形態素が規則的になるような変化が生じている。このように、宜蘭クレオールの形態素は、アタヤル語と日本語の要素が再編成を経て、独自の体系を作り出しているのである。

[G-3]

中国西南部チベット＝ビルマ系言語における漢語文末助詞 **ba** の借用
—ダパ語とカム・チベット語を中心に—

白井 聡子

中国西南部で話されるチベット＝ビルマ系言語の一部に見られる、「無気両唇閉鎖音＋母音 a」(PA と表記する) という形式の文末助詞について、その広がりや機能を分析する。主として、ダパ語とカム・チベット語の言語資料を用いる。

PA は、いずれの言語でも推量文に用いられ、形式・機能の両面から対応関係があるように見えるが、音対応から、同源語ではなく借用されたものと結論づけられる。さらに、大言語である漢語に、形式・機能ともに共通性のある文末助詞“ba”がある。従って、PA は、漢語から借用されて、この地域の諸言語に広がった可能性が高い。一方、それぞれの言語における PA の機能を詳しく対照すると、一致しない点が見られる。漢語の PA (ba) は推量、確認、勧誘、申し出など非常に広い機能を持つ。しかし、ダパ語の PA の機能は推量が中心であり、カム・チベット語の PA は未実現推量、確認、勧誘の機能を持つ。以上の分析を踏まえて、言語接触状況を考察する。

[G-4]

コプト語サイド方言における二重冠詞

宮川 創

コプト語には 2 つの冠詞が連続する現象がある。コプト語サイド方言の文献でその出現例を抽出した。

結果、全体で 71 例が在証された。二重冠詞の組み合わせは定冠詞＋定冠詞と不定冠詞＋定冠詞の 2 通りがみられ、両者とも一定の関係節に先行していた。

第一冠詞のみ定/不定の交替が可能であることから、第二定冠詞は定性標識ではなく、関係節名詞化標識である可能性が高い。

文法化研究者がみれば、この第二定冠詞は定性標識から名詞化標識へと文法化した一例だと解釈され得るであろう。しかし、二重冠詞に後続できる関係節は非常に限られている。そして、定冠詞とこれらの関係節の組み合わせは極めて使用頻度が高い。

よって、二重冠詞構文の第二定冠詞＋関係節は関係節を従属部にとる高頻度の限定詞句を句ごと 1 つの名詞として用いた語彙化の一例であり、二重冠詞は名詞として語彙化した限定詞句に更に冠詞が付されて生じた現象であると本発表は主張する。

[G-5]

祖語の声調の調値復元アルゴリズム —桂南平話を例として

濱田 武志

祖語の調値(声調の具体的形式)の再建は議論の客観性・反証可能性を担保する事が難しい。この問題を解決すべく、本発表では分岐学(cladistics)を応用した調値復元アルゴリズムを示し、アルゴリズムの適用例として中国語方言「桂南平話」の祖語の調値を復元・再建する事を試みる。

分岐学には、通時的変化が最少で済むような(most parsimonious)各分岐点の形質状態を求める事が出来る。分岐学的演算を行える対象として娘言語の調値を定義するには、声調をレジスターと調形の対と捉え、高下降、低下降、高平板、中平板、低平板、高上昇、低上昇の七つを表す、正六角形状の格子の上に調値をコード化する方法がある。そして、演算対象を実数の集合から格子点の集合へ拡張する事で、系統樹全体の変化が最少となる祖語の調値を求めるアルゴリズムが構築できる。桂南平話の祖語には高下降、低下降、中平板、低平板、高上昇、低上昇が再建される(coda が閉鎖音の音節は中平板、低平板、低上昇のみ)。

[G-6]

オスク語における母音挿入とシンコピーの相対年代

大西 貞剛

本発表ではオスク語の先史における母音挿入と語中音節におけるシンコピーとの相対年代について検討し、《シンコピー》→《母音挿入》という相対年代の順序では説明できない語形が見つかることを示す。このような語形に対し、語源的な形成である可能性や形態的に形成された可能性について考察した後、シンコピーと母音挿入が同時代で生じていた可能性について検討する。また、不適格な音連続を修復するために母音挿入とシンコピーがオスク語の先史においてどのように作用したのか制約の観点からの分析について言及する。本発表で明らかになることは以下の三点である。1) オスク語の先史において語中音節のシンコピーと母音挿入には少なくとも共通の年代が見られる。2) 子音 + 半母音に後続する母音をターゲットにした語中音節のシンコピーはオスク語の先史において作用していない。3) オスク語の iyo 語幹奪格単数語尾 /-id/ は単数対格からの類推の結果生じたと考えられることができる。

[G-7]

契丹語における性・数の一致と文法的性の存在

大竹 昌巳

近年の契丹文字解読の進展により、契丹語には性・数の一致が見られることが明らかになってきた。しかし、先行研究の見解は一致しておらず、人間以外に性を認めない見解や、文法的性は広く認めるものの、性の一致に混乱が見られるとする見解が存在する。

本発表では、それらの見解とは異なり、契丹語には文法的性が人間名詞以外にも存在し、性の一致の混乱も基本的には存在しないことを主張する。はじめに、契丹語での一致がどのようなものかを整理して主節述語は主語の性・数と、連体修飾節の述語は被修飾名詞句の性・数と一致することを明らかにし、無生物名詞にも性が存在することを論証する。次に、性の一致の混乱が見られるとされる色彩に関する語彙を検討し直し、混乱がないことを示す。最後に、まだ十分な論証がなされていない契丹語の数の一致についても整理し、契丹語の性・数の一致の概要を提示する。

[G-8]

ツングース諸語において祖形 *ks が仮定される音対応について

風間 伸次郎

本発表では、いくつかのツングース諸語で 2 様の対応をみせる音対応について、その一因が言語接触によることを指摘する。まず、ウイльта語で *-ks-*、*-sk-* の両様の順序が観察される原因について、先行研究は第 2 音節以降でのみ転倒が起きたとみているが、これには多くの例外がある。*-sk-* をもつ語の大部分は *-skV* 「～の皮」という意味の接辞を有している。したがって、これらの語は機能からの類推によって形式が均一化されたものとみることができる。次に、これまで指摘のなかったウルチャ語における *-sk-* の存在を指摘する。*-sk-* の連続はツングース諸語において一般的でないが、その地域はもっぱら (*-sk-* が一般的な) ニブフ語に隣接する地域に限られている。ウルチャ語、ウイльта語に共通する *pəskə* 「驚く」や、ウイльта語の *laskaŋa* 「かじか」が、ニブフ語 *fəskəd*, *lasq* からの借用に由来することを指摘する。

■ポスター発表（6月21日（日） 12:10–13:10）

[P-1]

「長距離例外的格付与」構文について

橋本 将

「懐かしい」「恋しい」といった感情を表す形容詞は、主節では「弘は名古屋が懐かしい」のように主格の Theme 項を取る。しかし、「弘は名古屋を懐かしいと思った」のような構文では、対格の Theme 項が可能である。先行研究によると、この構文では義務的にコントロールされる PRO が感情形容詞の経験者主語であり、主節の little v から従属節内のその PRO を越えて行われる長距離例外的格付与によって Theme 項に対格が付与される。本発表ではこの構文を再検討し、長距離例外的格付与は起こっていないと主張する。具体的には、感情形容詞の経験者主語が PRO であることを示すとされるデータには他の解釈も可能であることや、非感情形容詞が埋め込まれた構文で同様のメカニズムによって「*弘は野球を上手いと思った」のような非文法的な文が生成されてしまうという過剰生成の問題についての先行研究での解決案が実際には不十分であることなどを指摘する。

[P-2]

古代エジプト語神官文字資料のコーパス作成とその利用：
“外字”で書かれた文字言語のドキュメンテーション化の試み

永井 正勝，和氣 愛仁，高橋 洋成

発表者らは、古代エジプト語のパピルス文書 [大英博物館所蔵 BM10221] を対象に、その字形研究と文法記述を行うべく、(A)テキストに含まれる言語情報 [①文字・②形態素など] と (B)原資料の高精細写真データとを統合させたデータベースを作成している。データベースのメイン画面では、(B)写真データ（パピルスの全体写真）の任意の箇所にカーソルを合わせると、その部分の文字情報と形態素情報がポップアップ画面に現れるように実装した。これにより原資料を写真で確認しながら言語情報を理解することができる。また検索画面では、文字情報や形態素情報等の項目で検索を行うと、結果が写真とともに示される。加えて、検索結果を XML データとして出力させる装置も実装した。本研究は転写・グロス・写真を相互にリンクさせた文献資料の動的ドキュメンテーションの一例であり、発表では実際にデモンストレーションを行う。

[P-3]

セデック語パラン方言の二重母音について

落合 はずみ

セデック語（アタヤル語群・オーストロネシア語族）はパラン方言とトダ・タロコ方言群に二分される。二方言間の違いは二重母音に顕著であるが、これまでパラン方言の共時的記述において二重母音の考察がなされておらず、セデック語の二重母音を通時的に研究することができなかった。本発表の目的はパラン方言を通時的・共時的に分析することと、タロコ方言と比較することによりセデック祖語の最終音節に二重母音を再構することである。主張は4つある。(A) 1927年以前のパラン方言は最終音節に *aĩ*, *aũ*, *uĩ* の3つの二重母音を有した。(B) 1927年から1976年までの50年間で *aĩ* が *e* に、*aũ* が *o* になった。(C) 現代パラン方言の二重母音は *uĩ* のみである。(D) タロコ方言は現在でも *aĩ*, *aũ*, *uĩ* を最終音節に有するため、セデック祖語の最終音節に二重母音 *aĩ*, *aũ*, *uĩ* が再構できる。パラン方言は一重音化の改新で特徴づけられる。